

# ホーソンとメルヴィル ——奴隷制問題を巡って——

藤吉清次郎

(人文学部人間文化学科言語表象論コース)

## Hawthorne and Melville —— On the Question of Black Slavery ——

Seijiro FUJIYOSHI

*Department of Language and Representation, Faculty of Humanities and Economics*

**Abstract:** In Melville's literary essay "Hawthorne and His Mosses" (1850), a Virginian narrator enthusiastically praises Hawthorne's literary talent, discussing that the "blackness" of the human heart is accurately described in his works. Taking into consideration the fact that this essay was written at a time of intense sectional contestation over slavery in America, Hawthorne's "blackness" has to be seen from racial and political as well as aesthetic viewpoints. In my opinion, one of the reasons for the Virginian's praise of Hawthorne is that this northern writer was a "moderate" anti-abolitionist who hoped for the preservice of the "Union." Melville, who was opposed to black slavery, was undoubtedly critical of Hawthorne's racial attitude. Melville's "Benito Cereno" (1855), in which a clever black slave who revolts against his white master is sympathetically described, can be regarded as a work written to put the blame on white people—including Hawthorne—who cannot think of black slaves as human beings with feelings and intelligence. My conclusion is that Melville implicitly criticizes Hawthorne's racial conservatism by assuming the persona of a Virginian in "Hawthorne and His Mosses."

キーワード：奴隷制，暗黒，奴隷制廃止運動

はじめに

1850年に発表された、Herman Melvilleの"Hawthorne and His Mosses"（以下"Mosses"とする）というエッセイは、「ひとりのヴァージニア人」（"a Virginian Spending July in Vermont" 535）<sup>1</sup>が人間の心の「暗黒」（"blackness" 541）を余すことなく描き出す北部人作家 Nathaniel Hawthorne を絶賛するという設定になっている。このような物語設定をわれわれ読者はどう捉えるべきか。もちろん、この南部人のペルソナはこれまで論じられてきたように、メルヴィルが北部人作家ホーソンを「国民作家」に仕立て上げることによってアメリカの文学的なナショナリズムを人々に訴えかけるための文学的な戦略として導入された可能性は高い。しかしこの作品が発表されたのが1850年という、アメリカ社会が逃亡奴隷法問題で揺れ動いていた時期であることを考慮に入れば、南部人ペルソナ導入も、そして作品で論じられている"blackness"も、黒人奴隷制問題を射程に入れて考察する必要があると思われる。

本稿では、従来の批評において主に「文学的」な見地から捉えられてきたエッセイ"Mosses"に、当時の黒人奴隷問題がその影を落としていると想定し、「人種的」な観点から南部人ペルソナ導入の意味を考えてみたい。本論では、このエッセイそのものに考察を加えるというよりもむしろ、主

にメルヴィルとホーソーンの黒人観を比較検証することによって、南部人ペルソナ導入の背景にホーソーンの黒人観と彼の奴隷制への姿勢に対するメルヴィルの暗黙の批判が潜んでいることを論究したい。

### 1. 南部人にとっての“blackness”

“Mosses”を読む際に読者がまず直面する問題は1850年に語り手の南部人がホーソーン作品の“blackness”を絶賛するという設定である。南部人の語り手はホーソーンの描き出す“blackness”に魅了されていると述べている。しかし、そう語るヴァージニア人の脳裏に不安がなかったと言えるであろうか。奴隷州であるヴァージニアでは1831年の夏、黒人奴隷 Nat Turner が約70人の仲間とともに、反乱を起こし、女性や子供を含む少なくとも55人の白人を殺害するという事件があったばかりであった。この事件の後、ヴァージニアでは反乱に備えて人口の約10パーセントにあたる101000人の市民軍を有することとなったという(Zinn 131)。Howard Zinnは“Rebellion, though rare, was a constant fear among slave owners.”(Zinn 131)と指摘している。その意味でヴァージニア人である語り手の意識には、ジンの指摘するような黒人奴隷の反乱に対する潜在的な恐怖があったはずである。

“Mosses”の中で、例えば、語り手はホーソーンの“blackness”について次のように述べている。

[T]his black conceit pervades him, through and through. You may be witched by his sunlight, —transported by the bright gildings in the skies he builds over you;—but there is the blackness of darkness beyond and even his bright gildings but fringe, and play upon the edges of thunder-edges of thunder-clouds.—In one word, the world is mistaken in this Nathaniel Hawthorne.... [T]his blackness it is that furnishes the infinite obscure of his background, —that background, against which Shakespeare plays his grandest conceits,...(541) (下線部は筆者による)

ここで語り手はホーソーンの“blackness”を天候の比喩を用いながら、その本質的な危険性を訴えかけている。語り手によれば、ホーソーンの陽光によって惑わされるかもしれないが、その上空には“the blackness of darkness”が広がっているという。次に使われている“thunder-clouds”は政治的な革命の不穏な空気を示すときの常套句であり、語り手はこれによって黒人奴隷の反乱を暗示していると考えられる。語り手は世間の人々はホーソーンを誤解していると述べているが、語り手が黒人奴隷を多数抱える南部社会の白人が抱える不安を吐露しているとすれば、この南部人の語り手も Harold Bloom 流に言えば、ホーソーンの“blackness”を「誤読」しているのかもしれない。つまり、語り手はホーソーンの描く人間の心の「闇」(“blackness”)の中に黒人奴隷の反乱を読み込んでいられるのである。

その点、語り手がホーソーンの短編“Earth’s Holocaust”(1844)を賞賛していることは注目に値する。この作品は同時代に行われていたさまざまな社会改革運動を厳しく批判したものである。この作品においてホーソーンは腐敗した世界をいくら表面的に改革しても、「汚れた洞窟」(“foul cavern”)である「人のこころ」(X 403)<sup>2</sup>を浄化しない限り、世界はなにも変わらないと言っているわけだが、南部人の語り手にとって、ホーソーンのそうしたメッセージよりはむしろ、この作家の社会改革主義運動そのものへの批判的な姿勢が魅力的に映ったのではないであろうか。より具体的に言えば、後に詳しく論じるように、この北部人作家は奴隷制問題でアメリカ社会が揺れ動く中、「奴隷制即時廃止」という社会改革運動に消極的な立場に立ち、どちらかと言えば、「連邦」(“Union”)の維持のために奴隷制存続を支持していたのである。「愛国主義者」とされる語り手にとって、南

部の奴隷制存続に理解を示すホーソーという作家はまことに都合のよい存在であったと考えられる。

以上のように、北部と南部が奴隷制度を巡り対立の様相を深めていた当時の社会状況を踏まえると、南部人の語り手による北部人作家の賞賛は奴隷制をめぐるアメリカの政治的な問題に起因していると思われる。したがって、これまでピューリタニズムと関連づけられて考察されてきた、“Mosses”におけるホーソーの“blackness”の問題も当時の黒人奴隷制という人種問題を考慮に入れて解釈し直す必要があるだろう。

## 2. メルヴィルの眼から見たホーソーの民主主義観と人種観

メルヴィルは心の闇を描き出す先輩作家ホーソーを尊敬していた。“Mosses”においてメルヴィルが芸術家ホーソーの作品を絶賛するその言葉に偽りや皮肉はないように思われる。しかし人種的な観点から見れば「民主主義者」としての彼はホーソーの奴隷制や黒人奴隷に対する保守主義的な態度にある種の不満を感じていたようである。そうした彼の気持ちは彼が1851年6月1日にホーソーに出した手紙に表れている。

At any rate, it is true that there have been those who, while earnest in behalf of political equality, still accept the intellectual estates. And I can well perceive, I think, how a man of superior mind can, by its intense cultivation, bring himself, as it were, into a certain spontaneous aristocracy of feeling,—exceedingly nice and fastidious,—similar to that which, in an English Howard, conveys a torpedo-fish thrill at the slightest contact with a social plebeian. (1) So, when you see or hear of my ruthless democracy on all sides, you may possibly feel a touch of a shrink, or something of that sort. It is but nature to be shy of a mortal who boldly declares that a thief in jail is as honorable a personage as Gen. George Washington. This is ludicrous. But Truth is the silliest thing under the sun.

It seems an inconsistency to assert unconditional democracy in all things, and yet confess a dislike to all mankind—in the mass. But not so.—But it's an endless sermon,—no more of it.... (2) What I feel most moved to write, that is banned,—it will not pay. Yet, altogether, write the *other* way I cannot. (Julian Hawthorne I, 401-402) (下線部は筆者による)

この手紙においてメルヴィルは民主主義についてホーソーとの立場の違いをはっきり打ち出している。下線部(1)で彼は「自分の容赦のない民主主義」によってホーソーが「しり込み」してしまうかもしれないと述べている。また彼は牢屋にいる囚人がワシントン将軍と同じくらい立派な人物であると主張する人間からしり込みすることは当然だとも言っている。Russ Castronovoはこの大胆な言葉を発するメルヴィルの心境を“He [Melville] sees with an Ishmael-like timidity his own tendency toward the arrogance of Ahab.”と指摘している(Castronovo 83)。カストロノヴォの指摘は後で述べるように、黒人奴隷制の在り方をめぐるメルヴィルの内的な葛藤を鋭く看取するものであるが、すくなくともここで言えることはこの比喻が彼が自らの民主主義観と世間のそれとの隔たりにをはっきりと意識していたということである。このことを裏付けるように下線部(2)においてメルヴィルは自分が最も書きたいことを書くことが禁止されていることを告白している。<sup>3</sup> この引用文に続く手紙文においてメルヴィルはホーソーの短編“Ethan Brand”(1850)に言及しながら、“I stand for the heart. To the dogs with the head! I had rather be a fool with a heart, than Jupiter Olympus with his head.”(Julian Hawthorne I, 402)と述べているが、この言葉は彼が民主主義の在り

方について「理知」(“mind”)より「心情」(“heart”)を優先させて考えていたことを示唆するものである。

この手紙に関して、Charles Foster は次のように指摘している。

It is clear that it is Hawthorne's social and intellectual conservatism against which Melville ranges himself in this letter. He is issuing a warning that there are dangerously democratic things coming in *Moby-Dick* and that Hawthorne had better be prepared for them, and when we look at these statements in the light of events and persons obviously impinging on Melville's consciousness in the spring of 1851, we see that there were good reasons for this Declaration of Independence from the man to whom he would dedicate *Moby-Dick*. (Foster 10-11)

フォスターはこの手紙の趣旨がホーソーンの“social and intellectual conservatism”への攻撃であると考え、メルヴィルが手紙を書いているとき執筆中の *Moby-Dick* (1851) が危険と思えるほど民主主義的なものを含んでおり、ホーソーンにその覚悟をしておくようにとの警告を発しているのだと解釈している。<sup>4</sup> 手紙における発言からフォスターはメルヴィルの手紙がホーソーンからの「独立宣言」であると捉えているのである。さらにフォスターは1851年4月逃亡奴隷法によって捕らえられた逃亡奴隷 Thomas Simms が所有者に送り届けられ、ひどい折檻をうけたこと、そしてメルヴィルの義理の父親である裁判長 Lemuel Shaw がこの件を担当したことなどから、メルヴィルは「逃亡奴隷法」の問題に真剣にかかわることになり、その影響が *Moby-Dick* に表れていると指摘している (Foster 11)。最後にフォスターは *Moby-Dick* における反奴隷制と急進的な民主主義について触れ、“Discovery of Melville's antislavery theme, of his commitment to radical democracy, furnishes the key not only to the meanings but to the aesthetic properties of the final third of the book.” (Foster 35) と述べている。

しかしここで断っておかねばならないことは、Alan Heimert も指摘するように、確かにメルヴィルは奴隷制に対して反感を持っていたが、彼が奴隷制廃止のほうには全面的には傾いていなかった点である (Heimert 513)。

この点、Bernard Rosenthal はメルヴィルの *Mardi* (1849) に描かれている奴隷制問題について、“The tug of justice on the one hand and the passion for order on the other left him intellectually powerless to find a course of action. This notwithstanding, he succeeded in defining the ambiguity that rendered him and so many of his contemporaries helpless in the face of an outrageous injustice.” (Rosenthal 51) と指摘している。メルヴィルはエマソンやソローのような明確な黒人奴隷解放主義者の作家たちとは異なり、奴隷制に関して「正義」(真の民主主義者として)と「秩序」(社会の平安を願うよき市民として)という相反するベクトルの間で、言い換えると「理想」と「現実」の間で烈しい内的な葛藤を抱え持つひとりの芸術家であった。まさしくこうした葛藤がメルヴィルの作品世界を豊かなものにするだけにとどまらず、彼に先輩作家ホーソーンの奴隷制、黒人奴隷に対する認識の甘さ(限界)を痛烈に意識させることになったと思われる。

### 3. ホーソーンの黒人観

では、ホーソーンの奴隷制、黒人奴隷に対する認識の甘さとは一体何か。ここでまず、この作家の奴隷制、黒人奴隷についての考え方の本質に迫るために、彼の最初期のスケッチ“Old News” (1835)という作品を取り上げて検証したい。このスケッチは40年以上前のボストンの古新聞を広げて、当時の社会を偲ぶという趣向のものであるが、1790年代のニューイングランドは奴隷制社会で

あり、当然奴隷の動向が紙面を飾ることとなる。語り手によれば、黒人は生来陽気もので、家事に適し、また多産である。成人した黒人の男女の人気は高く、彼らの品質を保証する広告が飾らぬ日はない。黒人たちに対する主人の扱いは「家族的な支配のもとで」(“under the domestic sway of our fathers”) 彼らが苦しい目にあうことはほとんどなかったという(XI 138)。実際、中流の家庭においては彼らは「家庭的な愛情」から除外されることなく、主人の家族たちの食卓を囲み、そしてその団らんのひととき、「暖炉の炎が主人の子供と楽しく戯れる彼らの赤褐色の顔を照らし出す」光景が見られるのである(XI 139)。このステレオタイプの黒人像は Stowe 夫人の *Uncle Tom's Cabin* (1862) のジム (Jim) を想起させるものであり、「正直さ」と「従順さ」しか取り柄のないとされる黒人は白人の主人の前でまるで犬のように振る舞うのである。

つまり語り手は白人による黒人支配が「家庭的な」ものであるかぎりには、彼らが故国にとどまって貧困生活で苦しむよりも、アメリカで奴隷として生きるほうがずっとましであると述べているのである。さらに語り手は黒人奴隷制について次のように締めくくっている。“Slave labor being but a small part of the industry of the country, it did not change the character of the people; the latter, on the contrary, modified and softened the institution, making it a patriarchal, and almost a beautiful, peculiarity of the times.” (XI 139) (下線部は筆者による) 語り手によれば、アメリカ国民は制度を修正して、穏やかな家父長制的とも言うべきものに仕上げていているという。つまり語り手は「家父長制的奴隷制度」を「美しい時代の特性」として是認しているのである。

確かに、“Old News”の時代設定は18世紀となっているが、おそらく作品の発表された1835年という、奴隷制廃止運動がかつてないほど盛り上り社会的な問題となっていた時代背景を考慮するとホーソーが19世紀の黒人奴隷制問題を意識しながら、語り手を通じて自分の考えを表明したものだと考えられるのではなかろうか。この点、ホーソーは1838年8月15日付けの日記の中で旅先の居酒屋で黒人に出会った出来事を次のように書き記している。

There were a good many blacks among the crowd. I suppose they used to emigrate across the border, while New-York was a slave state. There were enough of them to form a party, though greatly in the minority; and a squabble arising, some of the blacks were knocked down and otherwise maltreated. I saw one old negro, a genuine specimen of the slave-negro, without any of the foppery of the race in our parts; an old fellow with a bag, I suppose of broken victuals, on his shoulders; and his pockets stuffed out at his hips with the like provender—full of grimaces, and ridiculous antics, laughing laughably, yet without affectation—then talking with a strange kind of pathos, about the whippings he used to get, while he was a slave—a queer thing of mere feeling, with some glimmerings of sense. Then there was another gray old negro, but of a different stamp, politic, sage, cautious, yet with boldness enough, talking about the rights of his race, yet so as not to provoke his audience, discoursing of the advantages of living under laws—and the murders that might ensue, in that very assemblage, if there were no laws. In the midst of this deep wisdom, turning off the anger, and a negro's laugh. I was amused—there being a drunken negro, ascending the meeting-house steps, and near him three or four well dressed and decent negro wenches—to see the look of scorn, and shame, and sorrow, and painful sympathy, which one of them assumed at this disgrace of his color. On the whole, I find myself rather more of an abolitionist in feeling than in principle. (VIII 111-112) (下線部は筆者による)

ここで我々は、当時わき起こっていた奴隷制廃止運動に対するホーソーンの考えの一端を垣間見ることができる。まず黒人の集団のなかでホーソーンが最初に目をとめるのは「頭陀袋を肩にかけた」元奴隷である。だらしのないこの元奴隷にホーソーンが関心をよせたのは、北部でよく見かける「鼻持ちならない」黒人と異なり、その男が「典型的な奴隷ニグロ」であったからに他ならない。ホーソーンは奴隷時代に日常的にむち打ちを甘受しなかった元奴隷の屈辱的な体験に同情するというよりも、むしろその体験を「恨みの声を交えず」ただおもしろおかしく語る黒人の態度に「分別」を見いだし満足に浸るのであった。

その一方でホーソーンは「ごま塩頭のニグロ」に反感を抱いている。というのもそれはこの黒人が「厚かましくも」法の下の平等を説き、「黒人の権利」を主張するからである。最後にホーソーンは窓の外の数人の黒人女性にも目を移す。そのうちの一人が酔っぱらって教会に向かう同胞の不謹慎さを「軽蔑と恥辱と悲しみと痛みの入り交じった」気持ちで見つめており、その光景もまたホーソーンに関心をひくのであった。

上記の引用文のなかで自身が認めているように、確かにホーソーンは心情的には「アボリショニスト」として、自らの立場をわきまえた黒人奴隷あるいは黒人に対して同情的な気持ちを持ち合わせてはいた。しかし、この作家は奴隷制廃止主義には懐疑的であった。ホーソーンには黒人たちが白人のように「自由」を行使する能力を有しているとは到底思えなかったからである。

以上のようなホーソーンの黒人観は終生大きく変わることはなかったようである。最晩年のホーソーンは南北戦争を見て周り、その感想を記した“Chiefly About War-Matters”(1862)という戦争紀行文のなかで、北部の自由人としての黒人を「原始的な素朴さ」を擦りとられた存在として批判する一方で、南部から逃亡してきた黒人を「親しみやすい」存在として描いている。その紀行文の中で南部黒人奴隷についてホーソーンは「とにかく私は、これらの可哀想な逃亡奴隷たちをととても気の毒に思ったが、彼らのために何を望めばよいのかはつきり分からず、またどうすれば彼らを助けてやれるか、まったくわからなかった」(XXIII 420)と述べているが、福岡和子氏の言葉を借りれば、逃亡奴隷を「古代の牧神」(“the fauns ... of olden times” XXIII 420)と描くホーソーンはいわば「旅行者の眼差し」でただ観察しているにすぎず、「彼の描く南部黒人奴隷像が果たしてどこまで実像に肉薄したものであったか甚だ怪し」い(福岡 67)。人種的な保守主義の壁に閉ざされたホーソーンはついに黒人奴隷たちの苦悩を真の意味で理解できなかったのではなかろうか。

このように考えてみると、ホーソーンが大学の同級生 Franklin Pierce の大統領選挙用パンフレット(1852)において、ピアスの奴隷制存続の政策を支持したことも十分理解できる。結局ホーソーンは、黒人奴隷の境遇に同情しながらも、彼らの自由・権利よりも、「連邦」(“Union”)と社会秩序の維持を重視する考えの持ち主であり、そしてまた前掲のパンフレットの中で主張しているように、彼にとって奴隷制の在り方はあくまで「神意」(“devine Providence” V 416)に委ねられるべきものであり、「人為的」に操作されるべきものではなかったのである。

#### 4. メルヴィルの黒人観

メルヴィルの中編“Benito Cereno”(1855)はホーソーンのようなステレオタイプの黒人観しか持ち合わせない白人に向けて書かれた作品だと言える。貿易船バッチャラーズ・ディライト号の船長デラノ(Delano)は故障したスペイン商船サン・ドミニク号をチリの南岸沖で発見する。デラノが乗り込むとベニト・セレノ(Benito Cereno)船長が出迎えるが、その船には多数の黒人奴隷が積まれていた。メルヴィルはこの作品で、デラノ船長がステレオタイプな黒人観に縛られているために、このスペイン船において奴隷反乱が起きていることに気づかない様子を克明に描き出している。

人を疑うことを知らないお人好しとされる北部の白人であるデラノ船長は、サン・ドミニク号に

乗船すると黒人召使いバボ (Babo) が失神して倒れそうなセレノ船長を支え、甲斐甲斐しく世話をしているのを目撃する。そのときのデラノ船長の様子を語り手は次のように述べる。 “As master and man stood before him, the black upholding the white, Captain Delano could not but bethink him of the beauty of that relationship which present such a spectacle of fidelity on the one hand and confidence on the other.” (*Billy Budd* 176)<sup>5</sup> デラノ船長は黒人が白人の主人を助けるという行為のなかに見事な主従関係を見出しその美しき光景に感銘を受ける。このように白人と黒人の関係を捉えるデラノ船長の黒人観について、語り手は次のように述べる。

At home, he had often taken rare satisfaction in sitting in his door, watching some free man of color at his work or play. If on a voyage he chanced to have a black sailor, invariably he was on chatty and half-gamesome terms with him. In fact, like most men of a good, blithe heart, Captain Delano took to negroes, not philanthropically, but genially, just as other men to Newfoundland dogs. (*Billy Budd* 213) (下線部は筆者による)

デラノ船長が黒人を愛好するのは「博愛の精神」ではなく、「ニューファンドランド犬を可愛がる人のような情愛」をこめた好意によるものとされる。そして語り手はデラノ船長の頭の中に、黒人が犬のように従順に白人の主人に仕えるものだとの思い込みがあることを繰り返し述べている。このことはデラノ船長が黒人を白人が世話しなければならない子供のごとき存在として捉えていることを示唆している。<sup>6</sup> この点、Lucy Maddox は、“Captain Delano is an amiable and compassionate man who is pleased with his perception of himself as both an innocent boy and a generous father; he is also pleased with his comfortable perception of the dark-skinned other as one who combines spiritedness and docility.” (Maddox 80) と指摘しているが、こうした自己満足と人種的な偏見のためにデラノ船長はサン・ドミニク号において黒人奴隷の反乱が起きていることに最後まで気づかないのである。

以上のように、メルヴィルは黒人奴隷についてのステレオタイプな認識を持つアメリカ人をアイロニーの対象として批判しているわけであるが、こうしたデラノ船長の人物造型に関連して言えば、杉浦銀策氏も指摘しているように、1854年に Josiah Nott が *Types of Mankind* という人種論の本を出し、その中で黒人があらゆる人種のうちで最も劣等なるものと位置づけたことに反発し、メルヴィルがこのノットのステレオタイプの黒人観を打ち破るべく、黒人暴動の首謀者バボを創造した可能性も十分考えられる (杉浦 281-2)。その頭脳を使って陰謀をめぐらし、叛乱を企て指導したバボは「黒人はあまりにも愚鈍すぎる」というデラノ船長の黒人観を一変させたことであろう。結局取り押さえられたバボについて語り手は次のように述べる。

Seeing all was over, he uttered no sound, and could not be forced to. His aspect seemed to say, since I cannot do deeds, I will not speak words.... Some months after, dragged to the gibbet at the tail of a mule, the black met his voiceless end. The body was burned to ashes; but for many days, the head, that hive of subtlety, fixed on a pole in the Plaza, met, unabashed, the gaze of the whites; ... (*Billy Budd* 258)

バボは叛乱が失敗したあと、一言の自己弁護も自己正当化もせず、沈黙を守ったまま処刑される。バボの首は、何日もわたって広場の柱に晒されるが、その晒し首は白人たちを傲然とにらみ返す。この凄まじい凝視には自己の行為に対する誇りとともに、黒人奴隷の所有者たる白人に対する計り

知れぬ怒りと怨念が満ち溢れている。

“Benito Cereno”において、メルヴィルは黒人奴隷を威厳を持った生身の人間として描くことによって、そして同時に黒人奴隷への父親的な温情主義に潜む白人の自己矛盾と言い逃れを的確に描き出すことによって、ホーソーンを含む北部人の持つステレオタイプの黒人観を粉碎し、奴隷制を容認するアメリカ人を糾弾しようとしたのではないか。

## 5. むすび

以上、匿名の南部人が北部人作家を賛美するという“Mosses”の物語設定の意義を探るために、ホーソーンとメルヴィルの黒人観を考察してみた。結論として言えることは、メルヴィルの奴隷制問題への関心の高さや黒人奴隷問題で揺れる当時の時代背景などを考慮に入れると、メルヴィルがホーソーンの黒人奴隷制に対する姿勢を意識して“Mosses”を創作したことは充分考えられるということである。<sup>7</sup> そもそもホーソーンが奴隷制度即時撤廃の立場を取る作家として世間に知られる人物であれば、南部人のペルソナに北部人作家を賛美させるという物語設定それ自体が成立しえなかったであろうと推察される。南部人のペルソナが導入された“Mosses”はまさにその物語設定がゆえに、メルヴィルによるホーソーンの人種的保守主義批判のテキストとして読むことができるのである。

## 注

1. “Hawthorne and His Mosses”のテキストについては、*Moby-Dick* (N.Y.: W.W. Norton & Company, 1967) を使用した。“Mosses”についての引用はすべてこの版による。
2. ホーソーンの作品に関しては、*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII (Columbus: Ohio State UP, 1962-97) を使用した。巻数、頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。
3. 例えば、*Typee* の改訂版は出版社の圧力によって白人キリスト教文明を批判した箇所を削除せざるを得なかった。
4. Castronovo は、“Although he inscribed *Moby-Dick* to Hawthorne, Melville must have viewed Hawthorne’s support of Franklin Pierce’s proslavery presidency with aversion.” (Castronovo 79) と述べている。
5. メルヴィルの *Billy Budd* については、*Billy Budd, Sailor and Other Stories* (Baltimore: Penguin Books Inc, 1967) を使用した。
6. アメリカ政府が長い間先住民たちを、保護を必要とする「子供」と捉えてきた事実については Michael Paul Rogin, *Fathers & Children: Andrew Jackson and the Subjugation of the American Indian* に詳しい。
7. この点、Ellen Weinauer は“Mosses”の発表される1850年までにはメルヴィルの人種と奴隷制への関心はすでに十分に確立されていたと指摘している (Weinauer 331)。Weinauer は実際1847年の *Omoo*, 1849年の *Mardi* と *Redburn*, 1850年の *White-Jacket* の4作すべてにおいて人種と奴隷制の問題を取り扱っており、特に“Mosses”の前年に発表された *Redburn* には“Virginia and Carolina”, “African slave-trade”への言及があり、黒人奴隷への同情と奴隷制への疑義が表明されていると述べている (Weinauer 332)。



Works Cited

- Castronovo, Russ. *Fathering the Nation: American Genealogies of Slavery and Freedom*. Berkeley: University of California Press, 1995.
- Foster, Charles. "Something in Emblems: A Reinterpretation of *Moby-Dick*." *New England Quarterly* 34. I (March 1961), 3-35.
- Freimark, Vincent, and Bernard Rosental. (ed.) *Race and the American Romantics*. New York: Schocken Books, 1971.
- Hawthorne, Julian. *Nathaniel Hawthorne and His Wife* I, II. 1884. Boston: Archon Books, 1968.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 24vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Heimert, Alan. "*Moby-Dick* and American Political Symbolism." *American Quarterly* 25.4 (Winter 1963), 498-534.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. N.Y.: Oxford UP, 1991.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor and Other Stories*. Baltimore: Penguin Books Inc, 1967.
- . *Moby-Dick*. Ed. Harrison Hayford and Hershel Parker. N.Y.: W.W. Norton & Company, 1967.
- Rogin, Michael Paul. *Fathers & Children: Andrew Jackson and the Subjugation of the American Indian*. 1975. New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers, 1991.
- Weinauer, Ellen. "Hawthorne and Race." In *A Companion to Herman Melville*. Ed. Wyn Kelley Blackwell Publishing Ltd, 2006.
- Zinn, Howard. *A People's History of the United States: American Beginnings to Reconstruction*. 1980. N.Y.: W.W. Norton & Company, 2003.
- 杉浦銀策 (訳) 『乙女たちの地獄<1>——H.メルヴィル中短編集』 東京：国書刊行会，1983年．
- 福岡和子 「他者との遭遇 ——『大理石の牧神』論」『英文学評論』76 京都大学大学院人間環境学  
研究科英語部会 (2004年)， pp. 49-67.

平成19年 (2007) 11月16日受理

平成19年 (2007) 12月31日発行

